

7月号 病害虫防除

今年は8月上旬頃までのカメムシの発生量が多いと予想されるため、こまめに園内を見て回り、早期発見に努めるとともに、確認した場合は早急に防除を行って下さい。また、梅雨が明けると気温が高い日も多くなりますので、体調に注意して防除や管理作業を行いましょう。

<果樹類共通>

今年はカメムシ類の越冬量が多かったため、8月上旬頃までの発生は多いと予想されています。令和2年5月19日に佐賀県農業技術防除センターから発表された病害虫対策資料第2号によると、5月上旬から予察灯などでの誘殺数が多くなり、一部地域ではモモ・スモモ等の果樹園への飛来や果実での被害が確認されています。

カメムシ類の発生状況や飛来状況は地域や園によって異なりますので、園内をよく観察し、カメムシ類が認められたら早急に薬剤による防除を行ってください。合成ピレスロイド系薬剤やネオニコチノイド系薬剤の残効期間は10～15日程度です。なお、スタークル顆粒水溶剤2,000倍は、30mm程度の降雨で防除効果が低下するため、散布後に同雨量以上の降雨があった場合は再散布を行います。テルスター水和剤1,000倍は、降雨100mm程度まで効果が期待できます。

今後のカメムシ類の発生量と果樹園への飛来予測時期については、農業技術防除センターが発表する各種情報及びホームページを参考にして下さい。

(農業技術防除センターHP：http://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321899/index.htmlに掲載)



図1 チャバネアオカメムシ



図2 ツヤアオカメムシ

<露地カンキツ>

○黒点病

樹上の枯れ枝や園内のせん定枝等の本病の発生源については、既に適切に処分できていることと思いますが、まだ処分できていない場合には、早急に処分して下さい。

薬剤防除では、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤）単用の場合は薬剤散布後の累積降雨量が200～250mm、6月の散布時にマシン油乳剤を加用した場合は300～400mm、または薬剤散布1か月後を目安に再散布を行ってください。なお、マシン油乳剤は、7月以降に使用すると果実の糖度低下や腐敗の増加を招くことがあるので、6月までの使用とします。防除時期の目安となる累積降雨量は、圃場内に簡易雨量計を設置して確認します。降雨が続き累積降雨量を超えると予想される場合には雨の合間をぬって薬剤防除を行って下さい。

○チャノキイロアザミウマ及びミカンサビダニ

7月中旬は、これらの害虫の同時防除の適期です。コテツフロアブル4,000倍、ハチハチフロアブル2,000倍、アグリメック2,000倍等を散布して下さい。

○カイガラムシ類

近年、カイガラムシ類の発生が多い園が散見されます。6月には防除をされていると思いますが、7月中旬頃が2回目の防除のタイミングとなります。エルサン乳剤1,000倍またはモスピランSL液剤2,000倍、ダントツ水溶剤2,000倍、スプラサイド乳剤40 1,500倍等を散布しましょう。かけムラが無いように丁寧に薬剤散布を行って下さい。

○ゴマダラカミキリ

地際部に産卵する傾向が高いため、成虫が産卵する時期および卵～若齢幼虫期に地際部に対する薬剤散布が重要です。特に、幼虫が木部に食入すると防除が困難になるので、産卵～若齢幼虫期である7月中旬までにエルサン乳剤1,000倍またはモスピランSL液剤2,000倍、ダントツ水溶剤2,000倍、スプラサイド乳剤40 1,500倍等のいずれかの薬剤を、枝幹～地際部を中心に散布して下さい。

ただし、一部の地域においてスプラサイド乳剤に対する感受性の低下事例を確認していますので、本剤を散布しても成虫の発生が目立つ場合は他剤を用いて防除してください。食入した幼虫に対しては、捕殺するか、食入口の木くず等を除去した後にノズルを食入口に入れて園芸用キンチョールEやロビンフッドを噴霧します。

<ハウスミカン>

○アザミウマ類

アザミウマ類の加害による果実被害を抑えるためには、まずは園内への虫の侵入を防止することが重要です。園内外の除草を徹底するとともに、ハウスサイドにアルミ蒸着シートや光反射シート織込ネットを設置し、ハウス内へのアザミウマ類の侵入を防ぎましょう。

収穫時期が近い園で薬剤散布を行う場合は、薬剤の使用基準（収穫前日数）に注意します。また、アザミウマの種類によって効果の高い薬剤が異なりますので対象の種に合った薬剤を選択する必要があります。アザミウマごとの薬剤については、先月号に記載していますので、参考にして下さい。

<不知火>

○汚れ果症

施設栽培の‘不知火’では、赤道面から果頂部側に集中して黒点症状が生じる「汚れ果症」が問題となります。高湿度条件で発生が多くなりますが、マンゼブ水和剤の散布が有効です。露地栽培の黒点病防除と同様に、マンゼブ水和剤を前回散布後の露地における累積降雨量250mmまたは薬剤散布後1か月を目安として散布すると、高い効果が期待できます。ただし、園内の湿度が高く結露が長時間にわたって続くような園では十分な薬剤防除の効果が出ませんので、換気などを行って果実が結露しないように努めましょう。また、薬剤はかけムラがないように丁寧に散布して下さい。

<ナシ>

○黒星病

6月下旬から7月上旬は、黒星病が果実に最も感染しやすい時期です。6月下旬にスコア顆粒水和剤等のDMI剤を散布されたと思いますが、まだ散布していない園は早急に散布します。なお、①既に葉に黒星病の発生が認められる園、②6月下旬～7月上旬の散布以降、降雨が続く場合、③毎年収穫直前に被害が発生する園等では、7月上旬～8月中旬にも再

度 DMI 剤を散布して下さい。

○ナシヒメシクイ

殺虫剤の散布間隔が空いてしまった園では発生が多くなる場合があります。散布間隔が 10 日以上空くことがないように防除を行ってください。交信攪乱フェロモン剤を設置している園でも、園外から交尾済みの雌が飛来し被害が出ることもあるため、10～14 日の間隔で薬剤を散布しましょう。なお、‘幸水’では果実に薬液の汚れが残りやすいので、フロアブルが好ましいです。

○ハダニ類

収穫が近づいてきているので、果実の汚れの発生が少ないコロマイト水和剤 2,000 倍(収穫前日まで使用可)やスターマイトフロアブル 2,000 倍(収穫前日まで使用可)等で対応します。発生初期にしっかりと防除するように心がけて下さい。

○ハウスナシの収穫後の薬剤散布

収穫が終了したら、黒星病や炭疽病などを対象としてデランフロアブル 1,000 倍や、キノンドーフロアブル 1,000 倍等の保護殺菌剤を散布します。なお、ハダニ類や枝幹を食害する害虫の発生が多い園では殺虫剤も混用しましょう。ただし、収穫が終わっていない園が近くにある場合は、周辺の本ナシ樹等に薬液がかからないよう、農薬の飛散には十分注意して散布を行うようにして下さい。

<ブドウ>

○枝膨病

果実肥大期から袋かけ前までは果房の汚れ等の問題で枝膨病に効果の高い剤を散布できなかったため、菌が既に感染している可能性があります。袋かけ後の防除がまだの園では、本病に対して効果の高いストロビードライフロアブル 2,000 倍を散布し、蔓延を防ぎましょう。

○べと病

曇雨天が続くと発病が多くなる傾向にあります。薬剤は、IC ボルドー66D 50 倍、IC ボルドー48Q 50 倍のいずれかを散布します。散布間隔は 20 日以上空くことがないように注意して下さい。いずれの薬剤もアビオン E を加用すると防除効果が高まります。

<キウイフルーツ>

※キウイフルーツは品種によって使用できる薬剤に制限があるため、暦や関係機関の指導に従って薬剤を使用して下さい。

○果実軟腐病

まずは伝染源となる枯枝、剪定枝等を園外へ除去し処分して下さい。薬剤は、フロンサイド S C 2,000 倍(収穫前 30 日まで使用可)、アリエッティ水和剤 600 倍(収穫前 120 日まで使用可)、トップジン M 水和剤 1,000 倍(収穫前日まで使用可)等のいずれかを散布して下さい。果実だけでなく枝葉にも薬剤が十分に付着するよう丁寧に散布することが重要です。

アリエッティ水和剤は収穫前使用日数が 120 日と長いため、収穫までの日数に注意して薬剤を選択して下さい。

○すす斑病

6月～7月はすす斑病菌の果実への感染が起こる重要な時期です。まずは防風樹の刈り込みや除草作業を行って園内湿度を低下させるなど、すす斑病が発生しにくい園内環境にしましょう。ベンレート水和剤2,000倍またはダコニール1000 500倍、ストロビードラフロアブル2,000倍のいずれかを散布して下さい。果実だけでなく葉の表裏、棚面の上の方にある枝先にも薬液が付着するように十分量を丁寧に散布します。特に、遅くまで伸びているような枝には発生が多くなりますので、かけムラが無いようにしっかりと散布して下さい。